様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：２５４０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３８０７５５

研究課題名（和文）児童館の実践モデル開発にむけた釜ヶ崎「こどもの里」の実践に関する質的調査研究

研究課題名（英文）Qualitative research on the practice of children's village" in Kamagasaki towards the development on practical model of children's halls

研究代表者
八重樫　牧子（YAEGASHI, Makiko）

福山市立大学・教育学部・教授

研究者番号：８００６９１３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、児童館の実践モデルを開発するための基礎的資料をえるために実施した、子どもや子育て家庭の問題が集中している大阪市の釜ヶ崎において先駆的な実践を行っている「こどもの里」（無認可児童館）の質的調査研究である。
「こどもの里」の39年間にわたる実践記録や資料を整理し・分析することによって「こどもの里」の実践の特徴を明らかにするとともに、「こどもの里」や関連機関の職員を対象としたインタビュー調査や、「こどもの里」のフィールドワーク（子ども夜まわり）の結果を検討することによって、地域における児童館の子育ち・子育て支援の課題を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to gain the basic material for developing practical models of children’s hall. In order to fulfill our research purpose, we conducted a qualitative research at an unauthorized children’s hall called “Kodomonosato” in Kamagasaki, where has been developing pioneering practices on the issues of children and families are concentrated on.
This study demonstrated the characteristics of practice on " Kodomonosato(children's village)" by organizing and analyzing 39-years Kodomonosato’s documents and activities . Furthermore, the study clarified challenges of child development and child care support on children's hall in the community by examining collected data at the field work of “Kodomonosato(children's village)” and the interview data of staffs at the children's village and related agencies.

研究分野：児童家庭福祉

キーワード：こどもの里　包摂的地域子ども支援センター　子ども夜まわり　体験学習　エンパワメント　子育て支援ネットワーク　児童館　子どもの居場所

１．研究開始当初の背景

子どもを取り巻く家庭や地域社会が大きく変化し、家庭・地域社会の子育ち・子育て機能や教育力が低下している。その結果、子どもや親子関係に関する問題（子どもの貧困、子どもの犯罪・非行、いじめ、不登校、ひきこもり、自殺、児童虐待など）が深刻な社会問題となっている。このような子どもや家庭の問題を解決するために、すべての子どもや家庭を対象とした総合的・計画的な子育て支援が実施されている。児童館は、児童福祉法成立以来、すべての子どもの育ち（健全育成）を保障し、子育て家庭を支援してきた。今後も、児童館は地域社会の子育ち・子育て支援の拠点の一つとして重要な役割が期待されている。また、児童館にも指定管理者制度が導入されたので、児童館実践の効果を実証的に評価し、質の高い実践を積み上げ、児童館の子育ち・子育て支援の実践モデルを開発することが求められている。

児童館を利用している子ども、子育て中の母親そして児童館職員を対象とする量的調査（アンケート調査）を実施した結果、児童館の子育ち・子育て支援の効果を実証的に評価することはできたが、どのような実践を行うとより効果的か、また、今後の児童館の課題について検証するには限界があった。児童館の子育ち・子育て支援の実践モデルを開発するためには、地域社会において先駆的な実践を行っている児童館を対象に、質的調査（インタビュー調査など）を行うことによって、実践課題等を検討する必要がある。

そこで，本研究では、児童館の子育ち・子育て支援の実践モデルを開発するための基礎的資料を得るために、子どもや子育て家庭の問題が集中している大阪・釜ヶ崎において、先駆的な実践を行っている「こどもの里」（無認可児童館）の質的調査研究を行うことによって、地域における児童館の子育ち・子育て支援の課題や方向性を明らかにしたい。

２．研究の目的

本研究の目的は以下の通りである。

(1) 釜ヶ崎の「こどもの里」（無認可児童館）の子育ち・子育て支援の質的調査研究を行うことによって、「こどもの里」の実践の実態と特徴を明らかにする。

(2)「こどもの里」の具体的な実践として「子ども夜まわり」を取り上げ、子どもにとって「子ども夜まわり」がどのような意味を持っているのか明らかにする。

(3)「こどもの里」の実践からみえてくる児童館など子どもの居場所の子育ち・子育て支援の課題や方向性について考察する。

３．研究の方法

(1)「こどもの里」の子育ち・子育て支援に関する質的調査研究

①「こどもの里」の記録等資料の収集・整理・分析：「こどもの里」の記録等資料を収集し，整理，分析し、「こどもの里」の歴史、理念、利用者、実践内容、他機関との連繋などについて明らかにする。

②「こどもの里」の職員を対象とする具体的な実践内容に関するインタビュー調査：「こどもの里」の施設長（荘保共子）や職員に、インタビュー調査を実施することによって、「こどもの里」の子育ち・子育て支援の具体的な実践内容を明らかにする。

③「こどもの里」の関連機関に関するヒヤリング調査：「わかくさ保育園」の園長や、西成区要保護児童対策地域協議会の担当職員にヒヤリング調査を実施し、「こどもの里」との連携・協働等について明らかにする。

(2)「こどもの里」が実施する「子ども夜まわり」に関するフィールドワーク（参与観察）

「子ども夜まわり」に実際に参加し、体験することによって、「子ども夜まわり」が子どもにとってどのような役割を果たしているのか検討し、考察する。

４．研究成果

(1)「こどもの里」の子育ち・子育て支援に

関する質的調査研究

①「こどもの里」の子どもの状況

「こどもの里」に登録している子どものうち、ひとり親家庭や生活保護家庭が約 30%であり、子どもは，親の生活問題（生きるしんどさ）を抱えて生きている。家族の貧困は、子どもの貧困である。子どもの貧困は、経済的困窮だけではなく、さまざまな不利をもたらすが、こどもの里の子どもたちは、たくましく生きている。

②「こどもの里」実践の特徴

こどもの里の 39 年間にわたる実践を振り返ると、次のような「こどもの里」の実践の特徴が見えてきた。

まず、第 1 に、貧しい状況に置かれている子どもやその家族のニーズを徹底的に理解し、共感し、共に生きようとすることによって、館長の荘保共子（支援者）自分の価値観や生き方が変えられたことである。

第 2 には、すべての子どもに「生きる力」があることを信じ、多くの人との出会いを大切にした体験的な学習活動（「子どもの夜まわり」など）を重視してきたことである。

第 3 には、貧困等によって家庭を失った子どもたちに安心な場を提供し、必要ならば家庭に代わって子どもを一時的あるいは長期的に保護し、「生活の場」を提供していることである。

第 4 には、子どもの親を思う気持ちを最大限尊重し、どのような状況にあっても、親子の関係を断ち切らないで維持するために、子どもや家族が生活している地域社会（釜ヶ崎）から排除しないで、地域の中で「子育ち」・「子育て支援」に取り組んでいることである。そのために地域社会に子育ち・子育て支援ネットワークを創り、連携し、協働して問題の解決を図っている。

そして、第 5 には、様々なニーズを抱えた子どもやその家族を支援するために、「留守家庭児童対策事業（学童保育）」、「小規模住居型児童養育事業（ファミリーホーム）」、「地域子育て支援拠点事業（つどいの広場）」や「児童自立生活援助事業（自立援助ホーム）」のような公的な事業を活用していることである。また、必要に応じて「緊急一時保護・宿泊事業」など独自の事業を創設し、展開できる民間の特徴を生かした先駆的な実践を行っている。

③「こどもの里」の機能

網野（2002：178-187）は児童家庭福祉サービスとして 3 つの P と言われる普及サービス・増進サービス・予防サービスと、3 つのＳと言われる支援サービス・補完サービス・代替サービスをあげている。「こどもの里」では、「子どもの遊び場」を提供し、子どもの自尊心の回復や自己肯定感を育む「増進サービス」や「予防サービス」が行われている。ホームページや報告書で「こどもの里」を紹介する「普及サービス」も実施している。また、困難な問題を抱えた子どもや子育て家庭の生活相談などの「支援サービス」も実施されている。さらに、学童保育や緊急一時保護・宿泊などの「補完サービス」や、ファミリーホームのように親に代わって子育てを行う「代替サービス」も提供している。

「こどもの里」は、公衆衛生の視点からみると、貧困と虐待の第 1 次予防となる遊び場・休憩の場となる機能、第 2 次予防となる生活・子育て相談、逃げ場としての緊急一時避難の場として機能、さらに、第 3 次予防である生活の場としてのファミリーホームや自立援助ホームを備えている。「こどもの里」は、児童家庭福祉のすべてのサービスを包括的に総合的に実施しているといえる。

また、筆者は児童館の機能をジェネラリスト・ソーシャルワークの視点から、ミクロレベルの子育ち・子育て支援機能と、メゾレベルの地域活動促進機能と、マクロレベルの子育ち・子育て支援体制づくり機能に整理した（八重樫 2012：22-27）。「こどもの里」はこ

れらの児童館の機能も果たしているが、さらに、児童館としての機能だけではなく、地域における社会的養護機能も含む、多機能型の子育ち・子育て支援を展開しているといえる。

「こどもの里」のような居場所を、子どもや親にとって身近な生活圏、具体的には中学校区に1つ設置することができれば、子どもと親の状況や情報を共有しながら、子どもと親を見守り、ニーズに沿った細やかな支援を継続的に地域全体で行うことができる。

荘保（2016）が提案するこのような多機能型の「包摂的地域子ども支援センター」とでも呼ぶべき拠点を子どもや親にとって身近な生活圏に設置し、多様性を尊重した切れ目ない継続的な支援が求められている。

④地域における子育ち・子育て支援ネットワーク

家庭や地域の養育機能の低下や子どもの貧困が拡大している現在、子どもや子育て家庭の子育ち・子育て支援は、地域で展開されなければならない。「こどもの里」は、釜ヶ崎の「あいりん子ども連絡会」、西成区の「わが町にしなり子育てネット」と「西成区虐待防止・子育て支援連絡協議会」（西成区要保護児童対策地域協議会）の重層的なネットワークに支えられている。

西成区の子育ち・子育て支援ネットワークの第1の特徴は、このネットワークが貧困の課題が集積された地域性の中で生み出された「あいりん子ども連絡会」など民間レベルの取り組みを基盤していることである。第2の特徴は、中学校区単位の小地域ネットワークと、専門機関や地域団体との幅広くつながる緩やかな拡大ネットワークが形成され、重層していることである。そして、第3の特徴として、西成区要保護児童対策地域協議会には、6つの中学校区にそれぞれ実務会議（地区別ケア会議あるい教育ケース会議等）が置かれているが、「あいりん子ども連絡会」は、今宮中学校区・山王飛田地区ケア会議として位置づけられていることである。「こどもの里」の荘保館長は、この地区ケア会議の代表であり、毎月1回釜ヶ崎においてケア会議が実施され、関係機関との連携が図られている。

(2)「こどもの里」が実施する「子ども夜まわり」に関するフィールドワーク（参与観察）

「子ども夜まわり」と「学習会」は、1983年に横浜・山下公園で野宿者が少年らに襲撃され死亡した事件をきっかけに始まり、今日まで約30年間続いている。「子ども夜まわり」に関する文献研究と、「子ども夜まわり」の参与観察や参加者へのインタビュー結果から以下の点が明らかになった。

①「子ども夜まわり」は体験学習である。子どもたちは、なぜ野宿者を嫌悪し、排除し、差別するのかということを知識だけではなく、野宿者との出会いや対話による体験をとおして、深い共感の中で野宿者を理解し、子ども自身が変わり成長する。②意見表明権の行使としての「子ども夜まわり」や「学習会」の「分ち合い」は、子どもたちが自信を回復し、自尊感情を育むことになる。「子ども夜まわり」に参加した子どもたちは、子どもや大人や野宿者との生き生きとした出会いや対話を通して、エンパワメントされあう関係性を生み出している。

「子ども夜まわり」は、釜ヶ崎という地域社会において、野宿者や支援者や子どもたちとの直接的な対話による深い共感を通して、子どもたち自身が自尊感情を回復するエンパワメントの実践である。子ども虐待や貧困は、子どもの自己肯定感や自尊感情の低下をもたらす。自己肯定感や自尊感情を育成する「子ども夜まわり」は、虐待や貧困の連鎖を断ち切るために有効である。地域社会の釜ヶ崎化が進行している今日、地域社会の「子どもの居場所」において「子ども夜まわり」のような体験学習を実践し、子どもたちのエンパワメントを図っていくことが課題となる。

（3）これからの児童館など子どもの居場所の子育ち・子育て支援の課題と方向性

①社会全体で子どもや子育て家庭を支える地域のネットワーク（子育ち・子育て支援システムの再構築）

家庭や地域の養育機能の低下による子育ち・子育ての問題を解決あるいは予防をしていくためには、地域に社会的な子育ち・子育て支援システムを整備することが必要である。地域には、家庭の母親や父親、保育園・学校関係者、地域の専門職、職場、行政が顔の見えるつながりをつくり、連携・協働して支援に取り組むことのできる地域ネットワークが必要である。

「こどもの里」は、「子どもの貧困」により多くの家族機能を失った子どもたちやその家族が、どんな状況にあっても親子関係を断ち切らず地域で暮らしていけるよう遊びの場や生活の場などの居場所を提供している。そのために、地域ネットワークをつくり、支援者や行政と連携・協働して子どもだけでなく家族まで丸ごと支えている。

子どもたちやその家族のニーズに対応するためには、子どもたちやその親たちが地域から排除されるのではなく、まるごと地域で抱え込むことのできる「こどもの里」のような多機能型の「包摂的地域子ども支援センター」とでも呼ぶべき拠点を中心とした「包摂的地域子育ち・子育て支援システム」を構築し、多様性を尊重した切れ目ない継続的な支援が求められている。

②子どもや親のウェルビーイングの保障とエンパワメント

子育ち・子育て支援を行う上で大切なことは、「子どもや親のウェルビーイングの保障」である。ウェルビーイングとは「よりよく生きること」「自己実現の保障」といった意味である。子どもや親のウェルビーイングを保障するには、誰もが本来持っている生きる力を信頼し、それぞれの思いを聴いて共感的に理解し、ありのままの存在を受け入れ、寄り添い、いつも一緒に困難な状況を解決しようとすることが大切である。すなわち、エンパワメントが重要である。エンパワメントとは、人と人の生き生きとした出会いの持ち方であり、お互いがそれぞれうちに持つ力をいかに発揮しえるかという関係性である。出会いを体験し、継続的な対話から信頼関係が生まれる。「こどもの里」の実践は、エンパワメントの実践であり、このような実践を保障する子どもの居場所が求められている。

＜引用文献＞

①網野武博、児童福祉学　＜子ども主体＞への学際的アプローチ、中央法規、2002

②荘保共子、子どもの居場所「こどもの里」の取組―包摂的地域子ども支援センターを目指して―、子どもの虐待とネグレクト、18（3）、327-330、2016

③八重樫牧子、児童館の子育ち・子育て支援―児童館施策の動向と実践評価、相川書房、2012

５．主な発表論文等

[雑誌論文]（計 5 件）

①松宮透高、精神疾患のある親による子育て世帯支援における社会福祉の役割、社会福祉研究、査読有、125 号、2016、84―90

②松宮透高、子ども虐待防止に活かすべき精神保健福祉士の機能とその課題　メンタルヘルス問題のある親への生活・子育て支援を考える、精神保健福祉、査読有、47 巻 2 号、2016、96―99

③八重樫牧子、釜ヶ崎「こどもの里」（無認可児童館）の「子ども夜まわり」の実践、福山市立大学教育学部紀要、査読有、3 号、2015、135―141

④田中聡子、子どもの貧困の解決に向けて、人権と部落問題、査読無、870 号、2015、15―23

⑤松宮透高、精神保健福祉課題としての子ども虐待 ： メンタルヘルス問題のある親への支援拡充に向けて、社会福祉研究、査読有、117 号、2013、2―8

[学会発表]（計 8 件）

①八重樫牧子「子どもや子育て家庭を取り巻く課題とこれからの子育ち・子育て支援～『こどもの里』（無認可児童館）の実践からみえてくるもの」第 13 回日本社会福祉学会フォーラム・シンポジウム「児童を取り巻く課題と社会福祉実践の役割」、2017 年 3 月 26 日、おかやま西河原プラザ（岡山県・岡山市）

②松宮透高「メンタルヘルス問題のある親による子ども養育世帯への支援を考える」児童虐待防止全国ネットワーク 第 25 回シンポジウム ・基調講演・コーディネーター 、2017 年 1 月 22 日、青陵会館（東京都・千代田区）

③松宮透高、田中聡子、西村いづみ、八重樫牧子「民間支援機関を活用した要保護児童地域対策協議会の実効化」日本子ども虐待防止学会第 22 回学術集会おおさか大会、2016 年 11 月 26 日、大阪国際会議場（大阪府・大阪市）

④松宮透高、田中聡子、西村いづみ、八重樫牧子「メンタルヘルス問題のある親に対する保育士の対応機能と研修ニーズ」日本子ども虐待防止学会第 22 回学術集会おおさか大会、2016 年 11 月 26 日、大阪国際会議場（大阪府・大阪市）

⑤松宮透高「メンタルヘルス問題のある親による子ども養育世帯へのアウトリーチ支援」日本子ども虐待防止学会第 21 回学術集会にいがた大会、 2015 年 11 月 21 日、朱鷺メッセ（新潟県・新潟市）

⑥八重樫牧子、西村いづみ、田中聡子、松宮透高「A 市の認可保育所における虐待発生リスクのある世帯の実態とその支援課題―保護者にメンタルヘルス問題がみられる世帯への対応を焦点に―」日本社会福祉学会　中国・四国地域ブロック　第 47 回愛媛大会、2015 年 7 月 4 日, 聖カタリナ大学（愛媛県・松山市）

⑦八重樫牧子「釜ヶ崎『こどもの里』（無認可児童館）の『子ども夜まわり』の実践」第 15 回日本子ども家庭福祉学会全国大会、2014 年 6 月 8 日、新潟県立大学（新潟県・新潟市）

⑧八重樫牧子「子どもの貧困と子育ち支援―A 施設（無認可児童館）の歴史と実践を支える理念―」日本社会福祉学会第 61 回秋季大会、2013 年 9 月 22 日、北星学園大学（北海道・札幌市）

[図書]（計 1 件）

①八重樫牧子「第 4 章　子どもの貧困と『子育ち』支援―釜ヶ崎の「こどもの里」（無認可児童館）の歴史と実践を支える理念―」安川悦子, 髙月教惠編著『子どもの養育の社会化―パラダイム・チェンジのために―』御茶の水書房、2014 年、63―90

６．研究組織

(1)研究代表者

八重樫　牧子（YAEGASHI, Makiko）
福山市立大学・教育学部・教授
研究者番号：80069137

(2)研究分担者

松宮　透高（MATUMIYA, Yukitaka）
県立広島大学・保健福祉学部・准教授
研究者番号：10341158

田中　聡子（TANAKA, Satoko）
県立広島大学・保健福祉学部・教授
研究者番号：30582382

髙月　教惠（TAKATUKI, Norie）
福山市立大学・教育学部・教授
研究者番号：40270011

西村　いづみ（NISIMURA, Idumi）
県立広島大学・保健福祉学部・講師
研究者番号：90405522